

目次

神学を学ぶべき人とは？	9
第一部 序論	
第1章 概念と定義	14
第2章 神学の諸前提	18
第3章 権威の問題	24
第二部 生けるまことの神	
第4章 神についての知識	30
第5章 神の啓示	35
第6章 神の完全性	46
第7章 神の御名	64
第8章 三位一体の神	74
第三部 聖書—神の息吹	
第9章 特別啓示	90
第10章 靈感についての聖書の教理	96
第11章 靈感についての聖書の教理からの逸脱	105
第12章 聖書の無誤性	111
第13章 無誤性とキリストの教え	125
第14章 問題箇所	139
第15章 聖書の正典	155
第16章 聖書の解釈	163

第四部 御使い—仕える霊

第17章	御使いの存在	178
第18章	御使いの創造	183
第19章	御使いの性質	185
第20章	御使いの組織	190
第21章	御使いの奉仕	195

第五部 私たちの敵である悪魔

第22章	サタンの実在	202
第23章	サタンの創造と罪	208
第24章	サタンの活動	216
第25章	サタンの世界	225

第六部 悪霊—汚れた霊

第26章	悪霊の存在	234
第27章	悪霊の正体	241
第28章	悪霊の働き	245

第七部 人間—神のかたち

第29章	進化と起源	256
第30章	聖書と万物の起源	271
第31章	人間の創造	285
第32章	人間の構成要素	295
第33章	人間の墮落	304

第八部 罪

第34章	罪の聖書的な概念	316
第35章	罪についてのキリストの教え	324

第36章	罪の継承	333
第37章	罪の転嫁	339
第38章	個人の罪	347
第39章	クリスチャンと罪	351

第九部 私たちの主イエス・キリスト

第40章	受肉前のキリスト	360
第41章	キリストの受肉	366
第42章	受肉したキリストの人格	376
第43章	預言者・祭司・王なるキリスト	388
第44章	ご自分を ^{むな} しくされたキリスト	398
第45章	キリストの無罪性	404
第46章	キリストの復活と昇天	411
第47章	昇天後のキリストの働き	418

第十部 こんなに素晴らしい救い

第48章	救済論の前置き	424
第49章	救いについての聖書的用語	427
第50章	キリストの受難	430
第51章	キリストの死の意味	436
第52章	救いの結果	456
第53章	贖いについての諸説	473
第54章	選びの教理	476
第55章	贖いの及ぶ範囲	489
第56章	救いの適用	500
第57章	信者の救いの安全性	507
第58章	福音とは何か	518

第十一部 聖霊

第59章	聖霊はどのような方か	528
第60章	旧約時代における聖霊の働き	534
第61章	主の生涯における聖霊	541
第62章	御霊の内住	549
第63章	御霊の証印	556
第64章	御霊によるバプテスマ	561
第65章	御霊の賜物	569
第66章	御霊の満たし	583
第67章	御霊によるその他の働き	591
第68章	御霊についての教理の歴史	598

第十二部 「わたしの教会を建てます」

第69章	教会とは何か	612
第70章	教会の独自性	618
第71章	原則か形式か	628
第72章	教会政治のかたち	631
第73章	教会にふさわしい指導者	642
第74章	教会の礼典	656
第75章	教会の礼拝	668
第76章	教会のその他の働き	676

第十三部 来たるべきこと

第77章	終末論の序文	684
第78章	千年期後再臨主義の概略	687
第79章	無千年期主義の概略	694
第80章	千年期前再臨主義の概略	703

第81章	神とアブラハムとの契約	708
第82章	神とダビデとの契約	716
第83章	将来の出来事のアウトライン	721
第84章	患難時代	726
第85章	教会の携挙	748
第86章	患難期前携挙の見解	754
第87章	千年王国の住民	763
第88章	患難期中携挙の見解	777
第89章	患難期後携挙の見解	781
第90章	千年王国	794
第91章	将来行われる様々なさばき	800
第92章	復活と永遠のさだめ	808

第十四部 中心的な聖書箇所

第93章	神学研究のための中心聖句	820
------	--------------	-----

第十五部 定義

第94章	神学を学ぶためのいくつかの定義	830
------	-----------------	-----

聖句の索引	841
-------	-----

主題の索引	850
-------	-----

訳者によるあとがき	866
-----------	-----

神学を学ぶべき人とは？

神学はすべての人のためにあります。というより、すべての人が神学者であるべきです。いや実のところ、すべての人がすでに何かしらの神学者なのです。

ですから、ここに問題があります。素人の神学者であっても、専門的な神学者であっても、何も問題はありません。しかし無知な神学者や、いい加減な神学者であるなら、それは大問題です。そういうわけで、すべての人が神学を学ぶべきなのです。

神学とは基本的に、神について考え、その考えを何らかの形で表現することを意味します。より正確な定義については最初の章で取り扱いますが、この基本的な意味において誰も神学者です。無神論者でさえ神学を持っています。無神論者は神について考えたうえで、神の存在を拒み、時には信念によって、日常的には生活スタイルを通して、自らの神学を表現しているのです。クリスチャン以外の、様々な宗教に従っている人々は、偽りの神を真の神の代用とし、自らの神学を様々な方法で表明しています。

しかし、本書の読者のほとんどは、仮にイエス・キリストを信じていないとしても、神の存在は信じていらっしゃると思います。ですから、あなたの考え方がどれほど断片的であろうと、あるいは体系化されていようと、それは生ける神、実在する唯一の真の神についてなのです。だからこそ、あなたが神学を学ぶ理由は十分にあります。真の神について考えるために、あなたが費やす時間とエネルギーのすべては、あなたの心を広げるだけでなく、あなたの人生を変えます。

神学があなたの人生をどのように変えることができるか、その例として、責任(accountability)というテーマについて考えてください。私

私たちは皆、様々な度合いの責任を負っています。たとえば自分自身に対する責任があります。良心がその監視をしています。しかし、良心は鈍くなることも、麻痺することも、無視されることもあるので、その都度、責任感は低下します。社会に対する責任もありますが、その社会によって法的な基準が異なりますし、各個人がそれぞれの社会基準に違反して責任を逃れることもできます。その他にも、家族や、所属する教会、会社や企業などに対する責任もあります。しかし、真の神を信じる人々は、神に対する責任を負っていることを認めます。時に私たちは、神に対する現在の責任から逃れられると考えるかも知れませんが、しかし、将来の責任から逃れられる人は一人もいません。私たちは皆、キリストの審判の座の前に立つことになるからです。この神の審判の教理は、神の一面に私たちの考えを向けます。そして、それは思慮深い人生を今歩むことによって表現されるはずで

良い神学者には様々なタイプの人があります。この世の評価では無学とされても、神についての多くの知識を理解している人々があります。勤勉に学んでいますが、専門的な方法によってではないこともあります。とても熟練していて、著作が広く読まれている神学者もいます。専門的な神学者もいますが、多くはそうではありません。

本書は専門的でない方々のために書きました。もし専門家のために書くとなれば、多くの部分を異なる表現で書いたでしょう。言葉を単純にし、説明を複雑にしないようにと、絶えず注意する必要はなかったでしょう。専門家なら、難しい言葉や専門的な説明が理解できるからです。また、例話も使わなかったでしょうし(例話をふんだんに使っている神学書もありますが!)、脚注を最小限にすることもなかったでしょう。専門家は、ある主題について書かれたすべての文献に目を通したいものです(そんなことをできる人がいるのでしょうか?)。それが無理だとしても、最近の資料からなる様々な脚注をたくさん掲載することで、多くの文献に目を通したことを証明したいと思うのです。私

も他の本で、そのようにしたことがあります。けれども本書においては脚注を最小限にしました。脚注は、読者が疑問を持つかもしれないと思われる事実を書いた場合や、反対者の意見を不正確に引用していないことを明白にする必要がある場合に用いました。しかし、ほとんどの場合、取り上げた特別な主題について、役に立つと思われる書籍や文献を脚注に記しました。そうすることで、読者が希望するなら、その主題について詳しく学ぶことができます。

さて、神学が神について考え、その考えを表現することであるなら、本書が神についての正しい考えを反映し、それを正確にまた明瞭に表現し、読者の考え方と生き方を変えるものであるかどうか、この基準に従って読者が判断してください。

パウロの用いた「健全な教え」(Ⅱテモテ4:3; テトス1:9)、すなわち健全な神学は、いつも聖^{きよ}い歩みを生み出します。パウロが諸教会のために祈るとき、知識が増し加えられるようにと祈りました。それが、聖い歩みを生むことを知っていたからです(ピリピ1:9-11; コロサイ1:9-10)。健全な神学は単に信条の告白によって表現されるだけでなく、実を結ぶ生活によっても表現されます。そして、聖い歩みをするには健全な神学が土台となっていなければならないのです。

神学が私の人生をどう変え、あなたの人生をどう変えるかは、私たち一人ひとりの個人的な責任です。私たちの生き方が、キリストに似たものとされることが、神学を学ぶ究極の目標です。結局のところ、どのような神学書にもその力はありません。ただ、神とあなただけが、この目標を達成できるのです。

第一部

序論

第1章	概念と定義	14
第2章	神学の諸前提	18
第3章	権威の問題	24

第1章

概念と定義

第一部の表題である序論 (prolegomena) とは、単に前書き、あるいは予備的見解を意味します。序論は著者にとって、全体的な計画を読者に知らせる良い機会となります。そこでは計画の範囲や限界とともに、著者の考えの前提や、使おうとしている手順も明らかにします。序論には、その書に対して著者の持っている考えに、読者の興味を向ける役割があるのです。

一 神学の概念

神学書というものは、まずその範囲、焦点、限界について何かを語り始めます。「神学 (theology)」という言葉は、神を意味するセオス (theos) と理性的表現を意味するロゴス (logos) に由来し、神への信仰の理性的説明を意味します。ですから、キリスト教神学とは、キリスト信仰の理性的な説明を意味します。

少なくとも三つの要素が、神学の概念に含まれます。

(1) 神学は分かりやすいものです。理性的な方法で、理路整然としていて、人間の心で理解できるものです。

(2) 神学は説明が求められます。このため、次に積義 (訳者注：聖書本文の意味を明らかにすること) と体系化が必要です。

(3) キリスト信仰の源泉は聖書です。ですからキリスト教神学は、聖書に基づいた研究となります。こうして、神学は神に関する真理を発見し、体系化し、提示します。

二 神学の多様性

神学は、様々な方法によって分類できます。

(1) 時代によって。すなわち、教父時代の神学、中世の神学、宗教改革時代の神学、現代神学。

(2) 見地によって。すなわち、アルメニアン神学、カルヴァン主義神学、カトリック神学、バルト神学、自由主義神学、など。

(3) 焦点によって。すなわち、歴史的な神学、聖書神学、組織神学、弁証論神学、解釈学的な神学など。これらの分類の一部は、神学を学ぶすべての人にとって非常に重要です。

A. 歴史的な神学

歴史的な神学は、聖書を学んだ者たちが、聖書の教えについて、個人であるいは教会会議宣言のように団体で、どのように考えたのかに焦点が置かれます。歴史的な神学は、教会が真理と誤りをどのように公式化したかを示すとともに、神学者たちが教理を理解し述べる手助けともなります。学習者は教会史の貢献と過ちとを知ることによって、真理をさらに効果的に理解できるようになります。必要となれば、著者は本書に教理の歴史の一部を加えるつもりです。

B. 聖書神学

聖書神学という用語は、様々な方法で使われてきましたが、神学の学びに特別な焦点を置いて分類するのに役立ちます。非専門的な意味において、それは敬虔派神学(その反対は哲学的な神学)、聖書に基礎を置いた神学(その反対は現代思想に影響された神学)、あるいは積義的神学(その反対は思弁的神学)とすることができます。自由主義的見解を持つ現代の聖書神学の中には、後者のカテゴリー(訳者注:その反対の神学のこと)に該当するものもあります。積義的ではあっても、その解釈は聖書の教えを忠実に反映していません。多くの場合、彼らの

著作は(旧約聖書神学なら)王国・契約・神といった広いカテゴリーで、また(新約聖書神学なら)イエスの教え・パウロの教え・初代教会の教えといったカテゴリーで構成され、聖書全体の注解書にもなっています。

専門的な意味において、聖書神学の焦点はもっと狭く、聖書に記された神の自己啓示が、歴史の中でどのように進展したかを組織的に取り扱うものです。この定義から四つの特徴が明らかになります。

(1) 聖書神学の研究成果は、組織的な形で示されなければなりません。これは、聖書や神学に関する他の研究と同じです。聖書神学を提示するための体系や配列は、必ずしも組織神学が用いているのと同じ分類を利用する必要はありません。そうする義務もなければ、逆に避ける必要もないのです。

(2) 聖書神学は、神の啓示が与えられた歴史的土壌に注意を払います。聖書神学は、聖書著者たちの生涯、彼らを著作に向かわせた状況、著作を受け取った者たちの歴史的背景などを詳しく調べます。

(3) 聖書神学は、啓示を、それが与えられた^{ぜんしんてき}漸進的順序で研究します。聖書神学は、啓示が神の側のただ一回の働きによって完結されたものではなく、多様な人々を用いて、一連の継続した諸段階において明らかにされたものと認めます。聖書は啓示の進展の記録であり、聖書神学はまさにそこに焦点を置きます。それと対照的に、組織神学は啓示を完結した全体像として考察します。

(4) 聖書神学は、研究資料を聖書の中に見いだします。現に、正統的な組織神学も同様です。これは、聖書神学や組織神学が聖書以外の資料を用いることができないとか、そうしてはならないということではありませんが、神学あるいは教理それ自体は、聖書以外のどこからも導き出されることがありません。

C. 組織神学

組織神学は、啓示された聖書資料を相互に関係させて、神の自己啓示の全体像を体系的に示します。組織神学にも、歴史的背景、弁証論と擁護^{ようご}、そして解釈学の業績が含まれますが、焦点はあくまで聖書の教理の全体的構造です。

要約：神学は神に関する真理を、発見し、体系化し、提示したものです。歴史的な神学は、この真理について人々が歴史を通じてどのように述べてきたかに焦点を絞ることで、この目的を達成します。聖書神学は、神の真理の漸進的啓示を概観することによって、これを達成します。組織神学は全体的構造を示します。

第2章 神学の諸前提

一 基本的な前提

意識的に、あるいは無意識に、誰もが何らかの前提に基づいて行動しています。神はいないと言う無神論者は、きっと神はいないという前提を信じているに違いありません。彼らはそう信じているので、世界や人間や未来について、神を信じる人とは全く異なる見解を持っています。不可知論者は「神を知ることはできない」と断言するだけでなく、その信条を世界観や人生観全体の土台としていることとなります。もし私たちが真の神について知ることができるなら、不可知論者の考えはすべて、完全に打ち碎かれることとなります。神を信じる人は神の存在を信じています。その信仰を支えるに十分な証拠を持っていますが、根本的には信じているのです。三位一体論者は、神が三位一体であると信じています。それは聖書から導き出された信仰です。ですから、その人は聖書が真実であることも信じています。

これは分岐点となる前提です。もし聖書が真実でないなら、三位一体主義は間違いで、イエス・キリストは自ら主張された通りの方でなくなります。私たちは、自然や人間の理性からは、三位一体やキリストに関して、何も学ぶことができません。私たちの源泉である聖書自体が正確であると信じない限り、三位一体の神について私たちの学ぶ事柄が正確であると確信できません。このように、聖書の真実性に対する信仰は土台となる前提です。これは靈感と無^む謬^{びゅう}性の章でさらに詳しく論じることになります。

二 解釈上の前提

研究資料がとても重要であるなら、その取り扱いや使い方には注意を払わなければなりません。正確な神学は健全な解釈に基づいています。建物を建てるにあたって、まずレンガを焼かなければならないように、神学を組織化する前にまず聖書解釈学の研究が必要です。

A. 通常の平易な解釈の必要性

解釈についてのより完全な説明は第三部で取り扱いますが、まず適切な解釈の基礎として、通常解釈の重要性をここで述べる必要があります。神はご自身の啓示を与えるにあたって、真理を覆い隠すのではなく、伝えることを望まれました。ですから、私たちは聖書の解釈に際して、通常の解釈基準を用いることを前提とします。象徴、たとえ、型などが用いられる場合でも、それらはその基盤にある文字通りの意味に依存しています。それで、その解釈はいつも、神が通常の、平易な、文字通りの方法で伝えられるという考えによって支配されるべきことを覚えていなければなりません。このことを無視するなら、教父や中世の解釈者の特徴である、混乱した解釈と同じ結果になってしまいます。

B. 新約聖書の優先性

聖書全体が靈感されていて有益ですが、新約聖書は教理の資料として優先します。旧約聖書の啓示は準備的かつ部分的でしたが、新約聖書の啓示は完結していて完全です。例えば三位一体の教理は、旧約聖書で認めることができますが、新約聖書までは明らかにされていませんでした。また、贖い、義認、復活に関して、旧約聖書と新約聖書との教えの間に、どれほどの違いが存在するかを考えてみてください。とは言え、旧約聖書の教えを過小評価してよいとか、あまり靈感されていないという意味ではありません。むしろ神の啓示が漸進的に展開

する中で、旧約聖書は時間的には前に位置していて、神学的には準備的で未完成なものだと言っているのです。旧約聖書の神学は、ふさわしい役割を果たしています。しかし、それは新約聖書の真理の貢献なしには未完成です。

C. 証明聖句 (proof text) の正当性

自由主義神学者やバルト神学者は、保守派の神学者が自らの結論を導き出すための根拠として聖書の聖句を用いることを、度々批判してきました。彼らはなぜ抗議するのでしょうか。単に、証明聖句を用いると、自由主義の結論ではなく保守主義の結論に至るからです。そのため彼らは、この方法を不当で非学術的な方法だと批判します。しかし、学術論文に脚注があるように、証明聖句を根拠とすることは決して不当な方法ではありません。

もちろん証明聖句は、脚注を付ける場合と同様、正確に用いなければなりません。言っている通りの意味で用いなければならず、文脈から外れて用いてはならず、全体の意味は異なっているのに一部分だけ用いるようなことをしてはなりません。さらに、根拠となる旧約聖書本文に、後に新約聖書で明らかにされた真理を無理に読み込んでもなりません。

三 体系化する前提

A. 体系化の必要性

釈義と神学との違いは、用いられている体系にあります。釈義は分析し、神学はそれらの分析を相互に関連付けます。釈義は本文の意味を示し、神学はそれらの意味を関連付けます。釈義者は真理の意味を明らかにすることに努め、神学者は真理の体系を示すことに努めます。神学のゴールは、聖書神学においても組織神学においても、考察している教理を体系化することです。

B. 神学体系の限界

一言で言えば、神学体系の限界は、聖書の啓示の限界と一致していません。完全な体系を提示しようとするあまり、神学者はしばしば、根拠となる聖書のすき間を不確かな論理や推測によって埋めようという誘惑にかられます。

論理や推測にもふさわしい役割はあります。神の啓示は整然としていて、理にかなっています。ですから、論理は啓示を科学的に調査するにあたって、適切な役割を果たします。単語が組み合わさって文を構成すると、その文はいろいろな意味合いを持ちます。神学者は、これを何とか理解しようとします。

しかしながら、論理が、いわば真理を創作するために用いられるなら、神学者は、聖書の真理の限界を超えて自分の体系を押し付けるという罪を犯すこととなります。このことは時々、聖書が答えていない質問に答えたいという動機から発します。そのような場合(聖書中にはいくつかの難しい問題があります)、最善の回答は沈黙であって、巧妙な論法や、ほとんど可能性のない示唆や感情的な願望ではありません。とりわけ誘惑となる分野を例に挙げると、神の主権と人間の責任、贖いの範囲、死んだ幼児たちの救いといったものです。

四 個人的前提

神学を学ぶ者は、いくつかの事柄を前提としなければなりません。

A. 信じなければならない

不信者も神学を書いたり学んだりすることはできます。しかし信者には、神の真理を学ぶにあたって、不信者にはない特質と考え方があります。神の深みは御霊によって教えられますが、不信者は御霊を持っていません(I コリント 2:10-16)。

信者もまた信仰を必要とします。というのは、神の啓示のいくつか

の分野は、私たちの限りある知性では十分に理解できないからです。

B. 考えなければならない

最終的に、信者は神学的に考えるように努めなければなりません。そのためには、積義的思考(正確な意味を理解する)、体系的思考(様々な事実をすべて関連付ける)、分析的思考(関連する事実の優先性を評価する)、総合的思考(教えを総合的に組み合わせて提示する)が必要です。

神学と積義は、常に相互作用しているべきです。積義がすべての回答を提供するわけではありません。積義的選択が1つだけでなく、複数の解釈が可能な場合、どの解釈を選ぶべきかを決定するのは神学です。例えばある箇所は、救いの永遠性を教えているとも、そうでないとも取れます。それを判断するのはその人の神学体系です。しかしながら、自分の神学体系に固執するあまり、積義の結果、神学体系を変えたり修正したりする必要があっても、頑なに拒むようであってはなりません。

C. 信頼しなければならない

知性だけで神学者はつくれません。聖霊が現実に教える働きを行っておられると信じるなら、神学を学ぶにあたっては、御霊に働いていただくなくてはなりません(ヨハネ 16:12-15)。御霊の教育内容はあらゆる真理に及びますが、特にキリストご自身を啓示することに焦点が置かれています。これはもちろん聖書に啓示されています。この教育を受けるには、御霊に意識的に拠り頼む姿勢が必要です。それは謙遜な心と熱心な学びの態度となって表れ、御霊が歴史を通じて他の人たちに教えられた事柄も学ばずです。帰納的聖書研究(訳者注：いくつかの関連聖句から、ある教理を導き出す方法)は有益な学習方法ですが、それだけしか行わないなら、他の人たちの働きの結果を無視することになり、いつもそうしているなら、すでに他の人が行った学びをただ

無駄に繰り返すことになり得ます。

D. 礼拝しなければならない

神学の学びは単なる学術的研究ではありません。確かに学術的研究ではありますが、それは学ぶ者の人生を変え、過ちを悟らせ、心を広げ、チャレンジを与え、最終的には、神への深い畏敬の思いへと導く経験です。礼拝(worship)とは、礼拝される対象である方の価値(worth)を認めることを意味します。神についての学びに専念し、神がどれほど価値ある方であるか、その認識を新たにされない者がいるでしょうか。

第3章

権威の問題

神学の学びにおいて、権威の問題は基本的な原則です。キリスト教神学という広い概念の中で学ぶ者は皆、神の権威を真理のための絶対的基準にしているはずですが、神の権威をどのように考え、表現するかは、クリスチャンと呼ばれる人々の間にもかなりの違いがあります。

一 自由主義神学における権威

自由主義神学の特徴は主観主義です。ただし、その主観主義の焦点は人によって異なるようです。ですからこのように言う人もいます。『神のことばには『神と人との間のコミュニケーションをもたらす、神のあらゆる行動』が含まれる¹。』このようなコミュニケーションは、人間の理性、感情、良心によってなされます。

A. 理性

自由主義思想においては、常に理性が最も高い地位を占めてきました。確かに、理性の領域において、人と人とのコミュニケーションの基礎となる概念が形成されます。理性は真理を伝達するために必要な経路です。福音主義者もそのことを認めます。しかし、自由主義は理性を真理の審判者にし、しばしば真理の創造者にもしています。理性は、自分以上の、また自分以外のどのような権威にも従わない、独立した存在となっています。しかし理性には限界があり、過ちに陥りやすいのです。

B. 感情

合理主義に対する反動として、シュライアマハー (Schleiermacher 1768–1834年) は、感情の神学を提唱しました。彼は宗教的体験の分析を強調し、宗教の基礎を感情または意識に置きました。その結果、神学は人間学と心理学になりました。このためカール・バルトは、シュライアマハーを宗教的自由主義の典型と見なしました。

C. 良心

ある種の自由主義は、良心を権威の基礎として強調します。私たちの知識は絶対ではなく、限定的なので、人間の持つ基本的な道徳的本能が権威の基礎とされるのです。インマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724–1804年) は、この思想のリーダーです。ここでもまた、神学が人間学になってしまいました。

自由主義のあらゆる形態で、人間の性質が何らかの形で宗教的真理の源泉になっています。ですから聖書は、神と人間とこの世界についての人間の考えを含んだ、人間の推論の産物と見なされます。聖書は、人間の宗教的体験と信条の歴史的発展を記録した書物となり、保守派の人々が信じるような、歴史に介入し、人間を超越しておられる神からのメッセージの記録ではなくなります。

二 新正統主義における権威

新正統主義は、自由主義神学に分類されることもあれば、保守的神学に分類されることもあります。その理由は、一方で、啓示を与えるのは人間ではなく神であると主張することによって(これは保守的神学のように見えます)、自由主義と袂を分かつたからですが、他方で、聖書に関する自由主義的見解を引き続き教えているからです(それゆえ自由主義神学に見えます)。

カール・バルト (Karl Barth 1886–1968年) によれば、新正統主義における権威の基礎は、みことばだと言います。しかしながら、彼の言

う神のことばとは主にキリストのことです。「聖書は神のことばである方を証しているが、その証しは誤りを含んでいる。クリスチャンの宣言は神のことばであるキリストについての言葉である」と言うのです。

彼の考えはこうです。絶対主権者である神が、主導権を握って自らを啓示した。その中心は主にキリストの啓示にあった。キリストの生涯は啓示の縮図であり、キリストの死は啓示のクライマックスであった。聖書は自由主義の基準によって様々に解釈されているが、聖書は神の啓示を証している。それゆえ、聖書は絶対的権威を持っているのではなく、あくまで手段としての権威を持つに過ぎない。なぜなら聖書は私たちをことばなるキリストと遭遇させてくれるが、あくまで誤りのある手段だからである。この「危機的」時点に起こる信仰の遭遇において、神は自らを伝達する。これが絶対的な真理である。

新正統主義は、神の主権的主導権において客観性を求めますが、信仰の遭遇という経験において主観主義を実践します。聖書はこの経験に関与しますが、この経験の究極的な審判者であることは許されません。新正統主義は、外的で客観的な権威の基準を欠いています。

三 保守的神学における権威

保守的神学において、権威の基礎は人間の外部にあり、客観的なものです。

A. 保守的カトリック主義

ローマカトリック主義では、教会が究極的な権威を持っています。確かに、聖書が信じられてはいますが、聖書は教会によって解釈されなければならないとします。さらに、教会の伝統が聖書とともに神の啓示の源泉とされます。教会会議やローマ教皇の決定が過ちのないものとされ、教会のメンバーに拘束力を持ちます。

東方教会も、権威を、伝統や教会そのものや聖書に見いだす点では同様です。福音主義者は伝統に権威を与えることなどしませんが、カトリック主義が、自由主義の教えとは異なり、人間の内側に権威を見いだしていないことは一考の価値があります。

B. 保守的プロテスタント主義

「保守的」という言葉が、権威の基礎を人間的で主観的なものに置く自由主義を除外します。そして「プロテスタント主義」という言葉が、教会を権威の基礎とすることを除外します。ですから次の言葉に同意するでしょう。「正統的信仰とは、宗教的権威の基礎を聖書に限定するキリスト教界の一派である²。」聖書は神の客観的啓示の書であるので、保守的プロテスタント主義にとって権威の基礎です。

確かに、聖書に記された神の啓示を理解するには、贖われた心で理性的に考える過程が必要です。聖書に啓示されていないことや、理解の及ばないことは、信仰によって受け止める必要があります。教える働きをされる聖霊に拠り頼む態度や、神の前で明らかな良心や、歴史の教訓から学ぶ洞察力が必要です。時々、保守的信仰の人であっても、聖書が唯一の権威の基礎であることを、言葉で否定しなくても、実生活で否定している人がいます。

(1) 実生活において、伝統主義者や教派心の強い者が、自分たちの信仰信条を聖書の権威と取り替えてしまう場合があります。信仰信条は真理を表明するために役立ちますが、真理を判断する権威とはなりません。信条の声明文は誤りに陥ることがあり、改訂されるかもしれないものなので、聖書の権威に服従しているべきです。

(2) 実生活において、あるグループは、伝統や習慣に聖書と同等の権威を与えています。教会の指導者は、そのメンバーのために、権威ある指導を行うように神から命令を受けています(ヘブル13:7, 17)。しかし、教会の規則や目標は間違っている場合もあり、訂正される必要も

あります。何より、いつも聖書の権威に服従していなければなりません。

(3) 実生活において、保守派の中には、宗教的体験に権威を与える人々がいます。健全な体験は、聖書の権威に忠実に従う結果生まれます。ですから、すべての経験は聖書によって導かれ、支配され、守られているべきです。経験を基準とし権威とすることは、客観的な規範を主観的な実存主義と取り替えてしまった自由主義者と同じ過ちを犯すこととなります。

下図のポイントに注目してください。客観的な権威である聖書が、何かによって補足されたり、妥協させられたり、廃棄されたりするなら、神への信仰は弱められるか、それどころか放棄されることとなります。

正統主義	新正統主義	自由主義	信仰内容
○			客観的
○	○		超越的
○	○	○	有神論

注

1. L. Harold DeWolf, *The Case for Theology in Liberal Perspective* (Philadelphia: Westminster, 1959), 17.
2. Edward John Carnell, *The Case for Orthodox Theology* (Philadelphia: Westminster, 1969), 13.